

## 農業と環境 — 環境と農業の新たな課題

古沢 広 祐 (目白女子短期大学)

### (一) 多様性と「共」的セクターの可能性

私たちが生きている時代は、人類史の長い時の流れの中でもおそらくきわめて特異的な時代と言っていだろうか。産業革命を境にして人類の活動は、人口増加、エネルギー消費、情報量、交通量などをみるかぎり、飛躍的成長を上げてきた。その中でも二〇世紀という時代をみた場合、その成長ぶりはまさに驚異的ともいえる動きをみせている。おそらく人類史上二度と再び起こることのないような急激な成長の時代を、今日の私たちは生きていると言っても過言ではなからう。

九二年六月ブラジルで開かれた「地球サミット」(国連環境開発会議)では、政府間レベルでの協議とは別にNGOと呼ばれる環境保護団体や市民組織の取り組みが注目をあつめた。なかでもNGOの生物多様性の見方は、政府のものと比較して、いわば生物社会と人間社会の多様性が同列なものとして位置づけられており、文化や社会、あるいは農業や農村、衣食住の生活様式、さらには人々の精神的世界の多様性までもが位置づけられている点で注目された。すなわち生物多様性を守るということは、ただ原生的自然だけを残す聖域づくりにとどまるものではない。自然の多様性にはぐくまれ相互に交流することを通じて、人類は多様な文化や社会を形成し、伝統や生活様式を産みだしてきた。そのことの再認識、再評価を多様

性の本質的な意味としてとらえようとしている点がたいへん重要なのである。

これは熱帯地域を中心に最近注目され始めているアグロフォレストリー（農業と樹木・林業的なものがワンセットの生態系として維持管理されるシステム）といった例を見てもよくわかる。わが国の農業や農山村に歴史的に育まれてきた生活文化や生活技術（例えば自然の利用や藁の文化等）も今日的視点から環境との相互作用の展開としてとらえ直していくことが必要だと思われる。地球環境を全体として見た場合に、人間が居住し関与する地域として最大の面積を占めているのが農林生態系地域（放牧地も含む）である。自然環境と人工環境の接点ないし中間的な位置を占める「緩衝地帯」として、様々な大切な機能を担っているこの場所をどのようにして維持・管理していったらよいか、そこに地球環境安定化のための非常に重要な鍵があるのである。

これからの一次産業の重要な役割として、世界の各地域で生態環境とのバランスのとれた環境調和型農林業システムを育成して行くことが国際的な政策目標となっていくではなからうか。それは地球環境の不安定化や地域固有の文化の衰退、さらに世界的な都市爆発現象に対する防波堤のような役割を果たすものと考えられる（農業が担う生態的安全保障）。（\* 拙稿「食糧安全保障を徹底検証する」、別冊宝島一四五「農業大論争」、JICC出版、一九九一年。

\* M・レドクリフト著『永続的発展——環境と開発の共生』

「共訳」、学陽書房、一九九二年。）  
また、これから課題として浮かび上がってくるのは、社会・経済システムの組替えともいえるべき問題ではなからうか。現時点で見る

かぎり、最近までは社会主義に対する資本主義の勝利あるいは計画経済の破綻と市場経済の優位といったレベルで語られることが多い。しかし、この問題をまったく別の枠組みすなわち三つの社会経済システムの動態変化としてとらえ、協同セクターないし「共」的セクターがもつ可能性として考えることが重要である。すなわち三つの社会経済セクターとは、市場メカニズム（自由・競争）を基にした「私」的セクター、計画メカニズム（集権・管理）を基にした「公」的セクター、協議メカニズム（分権・参加）を基にした「共」的セクターとして区分けをして考えてみようということである。

この三つの区分けはあくまで便宜的なものであり、現実には相互に重なりあって存在する場合も多い。このなかで、「共」のセクターとは、歴史的には例えば村落共同体がもつ入会地ないし共有地（財産）の維持・管理や、道普請、水路の掃除そして結いと呼ばれる労働力の助け合い等がすぐ思い浮かぶ。だが、それは都市的生活様式の中にも形を変えて存在している。例えばさまざまな市民団体のボランティア的活動や（ふつう経済的評価はなされない）、経済行為としては共同購入グループの活動から生協や農協など既存の協同組合における活動、その他利潤目的ではないコミュニティや社会的な事業・サービスなどが、実にさまざまな分野に広がっている。この「共」的セクターについては、すでにいくつ論じられ始めているが、例えば多田政弘氏の「コモンズの経済学」（学陽書房）などがある。そこではヘイゼル・ヘンダーソンの『産業社会の生産的構造』の四つの層（GNP「私」的セクター、GNP「私」的セクター、社会的対抗経済、自然の層）をベースに、「共」的セクターを非貨

幣部門として扱っているが、私としては貨幣部門を含むより広い範囲をカバーする、いわば協同的な営みのさまざまな形態を考えている。

## (二) 協同と共生による価値実現

国や歴史的経緯によって「共」的セクターにはさまざまな動きがあり、多くの究明すべき課題が横たわっている。そのような現実の動きについて、一例として、わが国における産直運動の展開過程を見てみることは重要である。一九七〇年代以降にとくに顕在化してきたのが、食品公害や農業汚染を契機に生まれた安全性に力点を置いたグループ共同購入型産直で、有機農業運動の広がりや生協運動の取り組みのなかで幅広く展開されている。その場合、例えば産直活動の三原則（産地・生産者が明らかたこと、栽培仕様が明らかたこと、生産者との交流があること）をみるように、安全性のみならず相互の信頼関係と交流を重視している点が注目される。それはどちらかと言えば、食べ物を利潤動機を組み入れて流通させる既存の市場システムの矛盾に対して、対抗する運動論的色彩を強くもっていることから「対抗的」産直ととらえることができる。

今日、そうした産直の取り組みはさまざまな特徴を打ち出しながら多彩な展開をみせている。そこで注目されるのは、単なる経済的メリットだけではない、生産者や消費者の主體的なかわり合いのなかで、いわば新しい価値の発見・創造ともいうべき営みが生まれている点である。それは、しいて言えば「創造的」産直の展開ともよぶべき動きである。

そこで興味深いのは、食生活や生活形態が既存の商品社会の影響から距離をおいて自立した生活様式を生む動きがみられることであ

る。例えば、頭で描く食事メニューに合わせて食材を調達するのではなく、四季折々の農家の生産現場に合わせた、自然とのつながりや農業の姿を意識した食生活が営まれる。すると、スーパーで余計な買物をしなくなったり、野菜料理が増え肉料理が減ったり、健康で医者にかかりにくくなったり、外見に惑わされずに結果的に生活が質素になる等、生活費がトータルで減るといったおもしろい現象が生じるのである。

こうした産直で取り扱われている品物は、ほとんどが有機農産物など何らかの意味でその独自の価値をもったものである。ふつうそれは差別化商品という呼ばれ方をする。いわゆる差別化商品の場合は、他にない特長を売り物にして、高付加価値商品として価格がつけあげられる。高い利潤が生みだされるブランド商品、あるいは特別な銘柄品などもその一例である。だが、ここで言うところの新たな価値というのは、従来の差別化商品とはいろいろな点で違った側面をもっている。つまり従来見られなかったような価値に目覚め、評価する流通システムの姿がそこにある。それは一言でいえば協同的な力で産み出された新たな価値の発見と創造といえるだろう。

相互の理解と啓発のもとで、新しい独自の価値の創造がめざされる「共」的セクターの特徴が、現実の社会・経済関係のなかでどのような普遍性をもちうるのか。それは次の三点に集約できるだろう。第一は、関係性の重視、一方的ではない双方向的な関係の形成がめざされている点があげられる。モノの流通を通して、対等で相互啓発的な関係が作りだされているのである。参加意識あるいは参加型民主主義の重視といってもよい。第二に、価格の公正さの追求、生産者・消費者の相互にとって公正な価格がめざされている点であ

る。それはまた両者にとつての公正ばかりでなく、生産の在り方そのものが環境保全を重視する（対自然関係）などの視点を含んでいることから、いわば経済の外部性をも考慮した広義の公正価格が追求される。第三に、多様な価値の発見・実現、いわゆる市場の価格メカニズムだけに評価基準を一元化してしまうのではない、かくれた副次的効用が芽生える可能性を開いている点である。

おしきせの価値にしばられることなく、価値を自ら発見・創造するという主体的行為こそが、いわば新しい協同運動の組織論・運動論である。つまり、競争的市場メカニズムを基礎とする今日の商品経済の合理性が実現する価値に対して、より豊かな価値ないし効用が、「共生」と「協同」の関係のなかで実現しうるのだという非常に重要な糸口がそこに示されている。そしてそこから、商品社会の市場メカニズムの拡大を抑え込んだ、いわば三つのセクターの混合体制といったビジョンが展望できる。

ともあれ、従来の二〇世紀型の産業社会がもっていたパラダイムは変革を余儀なくされるだろう。大量生産方式に象徴されるように、画一化と単一の価値尺度により他を排除したり、場合によっては抑圧し切り捨てて、特定の価値基準のもとで最大効率だけをもとめる極大化の原理では、近未来の破局を乗り越えることはできない。これからの社会のパラダイムでは、開かれた世界を意識し、多様な価値基準のもとでさまざまな効用を人々が主体的に発見し、創造しあう、いわば共生と創造の原理とでも言うべき姿が求められているのである。（詳しくは、『共生社会の論理』学陽書房、『共生時代の食と農』家の光協会）